習志野高校図書館ホームページ連載企画

シリーズ《本格ミステリ入門（海外編）》

執筆　大村　拓

# 第３回　「エレガントな推理　エラリー・クイーン」

←マンフレッド・リー（左）とフレデリック・ダネイ

**エラリー・クイーン**（フレデリック・ダネイ 1905-1982,
マンフレッド・リー 1905-1971，アメリカ）

**ミステリにおける「フェア（・プレイ）」と「アンフェア」**

皆さんがミステリを読む時、名探偵と競って謎解きに挑戦することはないだろうか。そして名探偵の謎解きを読んだ時、今ひとつ納得がいかずに、なんだかすっきりしない気分になった経験も多いのではないか。たとえば、読者が事前に知らされていないデータが重要な手がかりになっていたり、推理の過程に見落としや誤りがあったり、心理的な印象に基づいて推理を進めていたり。（たとえば「あんな気の弱い人が人殺しなどできない」、といった推理のこと。ミステリの醍醐味は一見人殺しなどできそうにない人が真犯人だったりすることなのだから、これでは困る。）このような推理は、ミステリの用語では**「アンフェア」**と呼び、避けるべきこととされている。反対に重要な手かがりがすべて事前に提示され、叙述にも故意の不正がなく、読者が完全に名探偵と同じ条件で推理に参加できるものを**「フェア（・プレイ）」**と呼び、優れたミステリの条件としている。そしてエラリー・クイーンこそが「フェア」なミステリの形式を完成させた作家なのだ。

**フェア・プレイの完成者―クイーン**

ミステリをフェアな形式にしようとする試みは以前からあったが、それを本格的に目指したのはアメリカのヴァン・ダイン（第５回で解説)という人であった。彼はフェア・プレイであるための 20 則を定めるなどミステリを純然たるパズルとするために努力を重ねたが、実作においては、精神分析的な手法で推理を進めることが多く、残念ながらフェア・プレイと呼べるものではなかった。しかし同じアメリカから出てきたクイーンは、物的証拠にもとづいて論理的な推理を進めるという方法でヴァン・ダインの欠点を解消し、完全にフェアな形式をたった一人で完成させてしまったのである。彼の初期の作品の多くには、解決部の直前に「読者への挑戦」というパートが挿入される。ここで作者は読者に高らかに宣言するのである。「手がかりは完全に提示しましたよ。あなたが正しく推理すれば必ず真相にたどり着けます。さあ挑戦してみてください」と。

しかし、勇ましく挑戦した読者のほとんどは、むなしくも敗れ去ることになるだろう。クイーンが提示したパズルは決して簡単なものではないのだ。あたかも補助線を何本も引かなければ解

答にたどり着かない幾何の問題のように。通常の三段論法（Ａ＝Ｂ，Ｂ＝ＣならばＡ＝Ｃ）のみならず、集合理論や背理法までも駆使して展開される推理は一点の隙もない。読者は、同じ手がかりを得ていながら真相にたどりつけない自分の不明を恥じるしかないのである。それでも作者にケチをつけることはできない。問題の提示から証明まで完全にフェアにできあがっているのだから。

**二人でひとり―共同ペンネーム**

エラリー・クイーンは、実はフレデリック・ダネイとマンフレッド・リーという二人のいとこ同士の共同筆名である。共作というのは意外と難しいもので、創作方針や利益配分などでもめて、コンビを解散してしまうことが多い。（藤子不二雄がその好例。）しかし、クイーンの二人は終生仲がよく、リーの死去までコンビが続いた。二人で念入りにプロットを練り込むため、ミスや見落としが少なくなり、これがクイーン作品の高品質につながっているのだ。

一方、クイーン作品の欠点は、論理一辺倒となり、小説としての魅力に欠ける点だ。恋愛やアクション、サスペンスといったミステリを装飾する要素は、意図的に排しているようにみえる。「私の小説は論理が中心ですから、それ以外の要素は不要です。」といわんばかりに。それゆえに、解決部に至るまでの部分が盛り上がりに欠ける傾向が強い。特に関係者の退屈な取り調べが延々と続く場面では、正直いって読み続けるのがしんどくなることもある。しかしクイーンの推理は、どんな末端の登場人物でも容疑から除外するためには論理的な検討を必要とする。ただの行きずりの人だから、犯人ではないなどときめつけることはないからだ。たとえば劇場が犯行現場となれば、すべての観客が容疑者となる。だからそれらを一人一人ふるいにかけざるをえないのだ。ここがクイーンの真骨頂でもあるので、是非とも我慢して読み続けてほしい。さすれば最後には必ず感動的なまでにエレガントな推理に出会えるのだから。

それでは以下にクイーンの代表作５作を選んで紹介してみよう。

**１．◎『エジプト十字架の謎（秘密）』（1932 年）（★933 ク　東京創元社）**

**【内容】ある朝、ウェスト・ヴァージニア州の小さな町で、交差点に立つ道標に首を切り落とされてはりつけにされた死体が見つかった。殺されたのは小学校校長を勤めていた男で、彼の家の扉にはなぜか「T」という文字が書かれていた。さらにその6ヵ月後、今度はニューヨークのロングアイランドでまったく同じ状況の下、百万長者のはりつけ死体が見つかると、事件はにわかに謎めいてくる。一時はさじを投げかけたエラリーだったが、最後にようやく真相を見抜くと、エラリーと犯人との間で最新交通機関を利用した手に汗握る追跡劇が繰り広げられるのだ！**

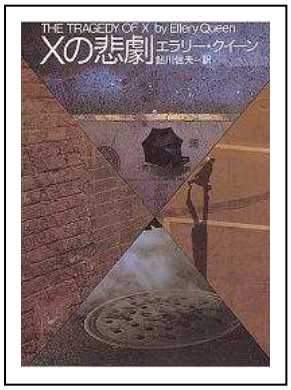
クイーンの初期の作品は、必ずタイトルに国名がつき、『○○××の謎（秘密）』（○○の部分に様々な国名が入る）というタイトルに統一されている。これら９冊は国名シリーズと呼ばれ、クイーン作品のパズルとしての魅力を楽しむのに、格好の題材となっている。

これらの作品で探偵役を務めるのは、作者と同名の**エラリー・クイーン**。頭脳明晰の好青年だ。それまでの名探偵がホームズのように風変わりなキャラクターであったのに反し、エラリーは見た目もさわやかで常識的な人物だ。ただしその頭の良さは神業である。そのため初期のエラリーは機械みたいで魅力がないという声もあるが、ある意味その推理力のすごさだけで充分個性的なのだから、性格造形はこのくらい控えめでちょうどよいともいえる。

さて本書の内容であるが、Ｔ字型の十字架（これをエジプト十字架というらしい）にはりつけにされた首なし死体をめぐるパズルである。連続首なし殺人に新興宗教がからみ、クイーンとしては珍しく派手な展開を見せる。これならクイーン初心者でも退屈しないで読み進めることができるだろう。そして読者は、現場に残されたヨードチンキの瓶に注目してほしい。クイーンはこれを手がかりに神業のような推理を展開し見事真相に行き着くのだが、同じことができる読者は

ほとんどいないだろう。

**２．◎『Ｘの悲劇』（1932 年）（★933 ク　東京創元社）**




**【内容】ニューヨークの市街電車で起こった事件は、サム警視の頭を悩ませるに充分なほど不可解なものだった。突然の豪雨を避けるため、婚約者や友人たちと市電に乗った株式仲買人が、中で崩れるように倒れた。上着のポケットに入っていた奇妙な凶器で殺されたらしいのだが、密室状況の車内には被害者に悪意を抱く者が大勢いた。サム警視は事件の解決を元俳優の探偵に依頼するが、第２、第３の殺人が発生するにおよび、事件は意外な様相を呈しはじめる。**

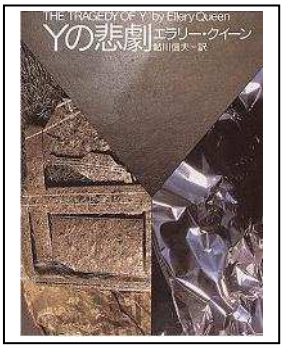
クイーンには、バーナビー・ロスという別名で書いた作品が４作ある。『Ｘの悲劇』に始まるこれらのシリーズは「四大悲劇」とよばれ、本格ミステリの最高峰とみなされている。探偵役を務めるのは老齢の**ドルリー・レーン**。引退した元シェイクスピア劇俳優だ。彼の最大の特徴は、完全に聴力を失っていること。しかし読唇術をマスターしているので、会話に不自由はない。そしてその神業のごとき推理力は、エラリーと比べてなんの遜色もない。

実はこれらの作品を執筆した当時、クイーンはバーナビー・ロスと同一人物であることを秘密にしていた。そのため当時はクイーンとロスではどちらが優れているかで論争が起こったほどである。クイーンは悪乗りして、二人のクイーン（ダネイとリー）がそれぞれクイーンとロスになりきって互いを批判しあったりしたものだから、世間はまんまとだまされていたというわけだ。数年後にクイーンとロスが同一人物であったことが明かされ、世間は驚愕したという。しかし「四大悲劇」を読めば、これはクイーン以外では書けないレベルの作品であることがすぐわかる。やはりクイーンの前にも後にもクイーンはいないのだ。

本書では、満員の市電の中で毒針で刺殺された第１の殺人に端を発し、船着き場、列車の中と連続して殺人が起こる。ホームズの時代からミステリの舞台といえば、いわくありげな田舎のお屋敷といった雰囲気満点なものが相場だったのを、クイーンはあえて都会的な舞台を選んだのだ。謎めいた雰囲気には頼らないで、論理一辺倒のパズルでありたいという、クイーンの独立宣言とも受け取れる。そして緻密な推理によってレーンが明かした真犯人は、想像もできないほど意外な人物だったのだ。論理的なのに意外、これは案外できそうでできない難業なのである。

ちなみにＸとは、第３の被害者が死に際に残したメッセージである。これを「**ダイイング・メッセージ**」とよぶ。これもクイーンのお家芸の一つである。

**３．◎『Ｙの悲劇』（1932 年）（★933 ク　東京創元社）**




**【内容】ニューヨーク湾内に漂う死体が発見された。それはクリスマスの４日前に失踪した富豪のヨーク・ハッターだった。他殺か、自殺か…。 だが、事件を担当するサム警部は、ヨークの遺品のたばこ入れの中に隠されていた紙片を見つけた。「完全な精神状態で、私は自殺する」という言葉が、そこには記されていた。2ヵ月後、ヨークの 13 歳になる孫が食卓の卵酒を一口飲み下したかと思うと、全身を痙攣させた。一命はとりとめたが、そこには猛毒が入っていた。サム警部は、事件について助言をあおぎに、探偵レーンを訪ねる。**

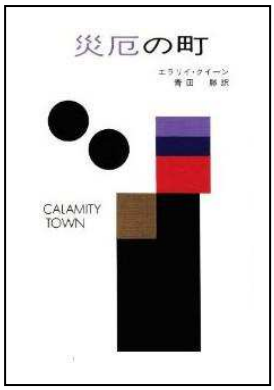
レーンが活躍する「四大悲劇」の第２弾である。そしてわが国では長らく史上最も優れたミステリと評価され、各種ベスト・テンでも常に１位を獲得してきた作品である。

本作の舞台となるのは、ニューヨークの富豪ハッター一族のお屋敷である。当主自身が「マッド・ハッター」とよばれる一族は、こぞって精神的に病んでおり、妖気と狂気に充ち満ちている。作者は『Ｘ』における都会的な舞台から一転して、いかにもミステリアスな舞台を用意してきたのだ。これが物語にウェットな要素を求める日本人の感性にピタリと符合したのだろう。ゆえに

本作はわが国では絶大な評価を得ることになる。一方、アメリカ本国での評価はそれほどでもないというのは、これも彼らの国民性ゆえなのだろうか。

そしてこのハッター一族を見舞った陰惨な謎を解き明かすレーンの緻密な推理は、読者の期待を裏切らない高いレベルのものだ。そして意外な犯人と意外な動機まで備わっている。やはりナンバー・ワンに推してみたくなるのは当然のようである。

**４．◎『災厄の町』（1942 年）（★933 ク　早川書房）**



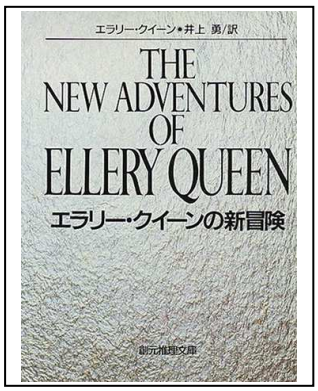

**【内容】 結婚式の前日に姿を消したジムが3年ぶりに突然戻ってきた。 彼の帰りを待ちわびた許婚のノーラと結婚し、二人は幸福な夫婦となった。 そんなある日、ノーラは夫の奇妙な手紙を発見した。 そこには病状の悪化した妻の死を知らせる文面が…。これはノーラを殺害するための計画か？　そして事件はエラリーの目の前で起こった。エラリーはジムの一挙手一頭足を見ていたが、彼にはカクテルに毒を入れるようなそぶりはなかった。しかし、そのカクテルによって一人の女性が死に、ジムは殺人の容疑で裁判にかけられることになった。状況証拠は全てジムを犯人と指名している中で、エラリーは驚愕の真実に到達する。**

初期の作品で徹頭徹尾パズルに徹してきたクイーンは、やがて行き詰まることになる。いくらパズルとして優れていても、筋運びや人物描写に魅力がなければ、小説としては失敗なのではないかと考えるようになったからである。そこでそれまでの確信犯的に人物造形をおろそかにしてきた作風を一変して、中期以降には人物描写に力を注ぐようになってくる。そこではまるで紙人形のようであった登場人物たちが、リアルな存在感をもつようになり、探偵エラリーも冷徹な推理機械から、悩みもするし関係者に感情移入もする血の通った人物として、生まれ変わることとなる。そしてこの時期の最高傑作が本作である。

本作の舞台となるのは架空の町ライツヴィルである。この町の由来から町並み、住人にいたるまですべて作者が頭の中でこしらえたものであるが、読者にはまるで実在の町のように立体感をもってイメージされる。この町の名士ライト家と関わることとなったエラリーは、ライト家で起こった不可解な毒殺事件に巻き込まれることになるのである。そしてエラリーが解き明かした真相は、実際に見えていたものとはまったく違った構図だった。

ここには初期の作品のような圧倒的な謎と推理の物語はない。シンプルな推理によって、ちょっと見方を変えたことで現れてくる意外な真相。初期の作風が暑苦しく感じる向きには、こちらの方が受け入れられやすいかもしれない。

**５．○「神の灯（ひ）」（◎『エラリー・クイーンの新冒険』（1940 年）所収）（★933 ク　東京創元社）**



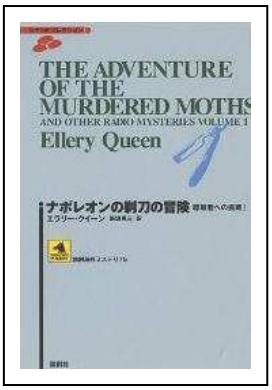

**【内容】 偏屈な老人メイヒュー氏がどこかに全財産を隠したらしい古い屋敷。そこに外国からやって来た女性の相続人。彼女を快く思わない屋敷の人々。不穏な空気に弁護士からクイーンが同道を求められ、令嬢アリスとともに乗り込むとそこには奇怪な親類たちが待ち受けていた。そして翌朝。離れの石造の豪邸「黒い家」は忽然と姿を消してしまった…。**

では最後にとびっきり魅力的な謎をもった傑作中編を紹介しよう。舞台となるのは、荒野に建つ荒れ果てた館「黒い家」。そしてこの石造３階建ての建物がたった一夜にして忽然と消えてしまうのだ!!　まるでホームズもののような雰囲気たっぷりの舞台設定と家屋消失というド派手な謎。いつもの論理一辺倒でストイックなクイーンらしくない作品だ。メイン・トリックだけにとらわれず、細かな伏線や推理の筋道にも注目してほしい。そしてタイトルの「神の灯」が示す本当の意味にも。この意味がわかれば、あなたにも謎は解けるはず。

## 私の一押し!!

このコーナーは、各回のテーマに関して、一般的には特に評価が高い作品ではないものの中から、私が個人的にお勧めしたい作品を紹介する。

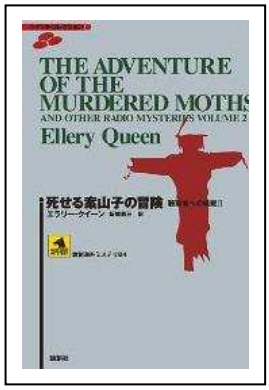
**◎『ナポレオンの剃刀（かみそり）の冒険』（2008 年刊行）（★933 ｸｲ　論創社）**




**【内容】 動く密室と化した列車内で男が殺された。容疑者は7人。しかもあるはずの宝石がなくなっており、車内のどこを探しても見つからない…。巧みなトリックとエラリーの名推理を堪能できる表題作を始め、国名シリーズを彷彿させる傑作シナリオ８編を収録。クイーン警視、ヴェリー部長刑事、ニッキイ他おなじみのメンバーも登場する本格ミステリ。全編“聴取者への挑戦状”つき。**

さてここまでエラリー・クイーンの魅力を紹介してきたわけだが、はたしてミステリ初心者にその凄さを理解してもらえたか、いささか心許ない。クイーン・ミステリの主眼は、一にも二にも論理によるパズルの解明だから、小説として面白いとはいいがたい。初心者が読むと、途中で退屈して投げ出してしまわないか心配である。そこで初心者にぴったりのクイーン作品はないかと考えてみたところ、格好の作品があった。それが本作である。

本作は小説ではなく、ラジオ・ドラマのシナリオ集（全８編）である。テレビ時代の現代人にはピンとこないかもしれないが、テレビのない時代はラジオが娯楽の中心で、声と音だけでつづられるドラマは一般大衆にとって大変ポピュラーな存在であった。これは日本でもアメリカでも変わらない状況で、本作はアメリカで人気を博したクイーン原作のラジオ・ドラマの傑作を集めたものである。もともと一般聴取者向けなので、シンプルでわかりやすくそして楽しく作られている。にもかかわらず、論理と推理はいつものクイーンなのだ。読者は安心して謎解きに参加してみよう。手がかりはフェアに示されている。知恵をしぼれば誰にでもエラリーと同じように真相にたどりつけるはずなのだ。



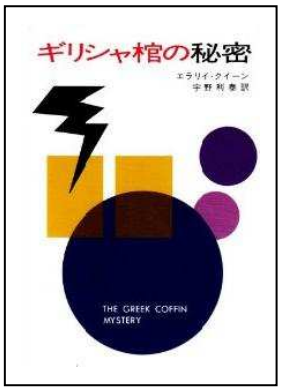

また本書では、小説でもお馴染みのエラリーやその父であるクイーン警視、警視の部下であるヴェリー部長刑事、そして小説ではあまり活躍しない秘書のニッキイが大活躍する。したがってキャラクターの魅力を求めて読むことも可能だろう。

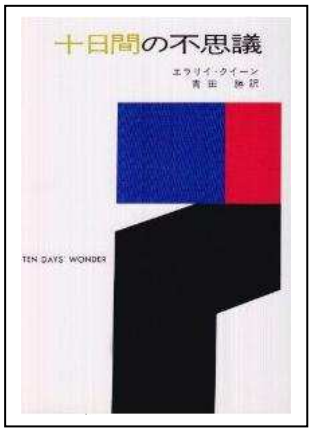
本作が気に入ったら続編の**『死せる案山子（かかし）の冒険』(★933 ｸｲ　論創社）**もどうぞ。前作と遜色のない内容が楽しめるはずだ。

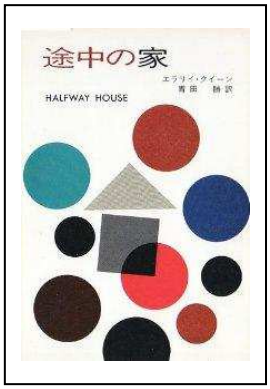
最後に、もっとクイーンを読みたい人のために、エラリー・クイーン・ファン・クラブ（http://www006.upp.so-net.ne.jp/eqfc/ranking.html）が選んだベスト・テンを紹介しておこう。

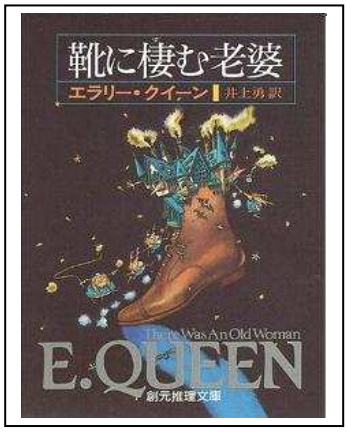
1．**◎『ギリシャ棺の謎（秘密）』（1932 年）（★933 ク　早川書房）**
2．**◎『Ｘの悲劇』（1932 年）（★933 ク　東京創元社）**
3．**◎『エジプト十字架の謎（秘密）』（1932 年）（★933 ク　東京創元社）**
4．**◎『オランダ靴の謎（秘密）』（1931 年）（★933 ク　東京創元社）**
5．**◎『Ｙの悲劇』（1932 年）（★933 ク　東京創元社）**
6．**◎『フランス白粉の謎（秘密）』（1932 年）（★933 ク　東京創元社）**
7．**◎『途中の家（中途の家）』（1936 年）（★933 ク　早川書房）**
8．**◎『災厄の町』（1942 年）（★933 ク　早川書房）**
9．**◎『十日間の不思議』（1948 年）（★933 ク　早川書房）**
10．**◎『靴に棲む老婆』（『生者と死者と』）（1943 年）（★933 ク　東京創元社）**

１位の『ギリシャ棺の秘密』を本稿で紹介しなかったのは、論理と推理だけで構成された長大なこの作品を初心者に勧めるのは無理があると判断したためだ。もしクイーン作品に馴染んでその魅力を理解できるようになった人は是非、クイーン・マニアが絶賛する『ギリシャ棺の秘密』を読んでみてください。








**第４回は 11 月下旬予定　「密室の巨匠　ジョン・ディクスン・カー」です。**
**「コラム」インタビュー記事はいよいよ「SR の会」へ！**

【注】 1.◎『　』で表したものは、当時あるいは現在でも出版されている本の書名です。
　　○「　」は、小説の題名です。
　　2.★で表したものは、習志野高校図書館が所有している本です。NDCも表記します。
　　3.小説の内容については、書体を違えています。

**2012.10.12　更新**